アッシリア史とフェニキア・カルタゴ史の対話から考える　開かれた古代地中海世界史研究

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2025-06-23
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 佐藤 育子, 丸小野 壮太
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24517/0002002938

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.

ヘレニズム～イスラーム考古学研究　2024,　59-70.

アッシリア史とフェニキア・カルタゴ史の対話から考える開かれた古代地中海世界史研究

Open studies on the Ancient Mediterranean World History in the view point of Assyrian History and Phoenician-Punic History

佐藤育子 (日本女子大学)・丸小野壮太 (常磐大学高等学校)

Ikuko Sato and Sota Maruono

1. はじめに

本稿は 2024 年 3 月 9 日 (土) に開催された第 29 回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会における研究発表「アッシリア史とフェニキア・カルタゴ史から考える開かれた古代地中海世界史研究」をもとにした共著論文である [1]。だがそもそもの経緯は、2022 年 12 月に金沢で開催された第 28 回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会での研究発表「開かれた古代地中海世界史研究－高大連携と市民協働型の歴史実践の構築を目指して」から始まった共同研究がその背景にある [2]。フェニキア・カルタゴ史を専門とし主に大学を拠点に歴史学に携わる佐藤と、アッシリア学を専門とし高校で教員として歴史教育に携わる丸小野が、歴史学と歴史教育の視座・方法論を応用して古代地中海世界史研究の枠組みを問い直す中で生まれたのが本稿のテーマである。本稿では特に歴史学の立場から考察する。

本稿の目的は以下の 2 点である。第一に、「アッシリア史とフェニキア・カルタゴ史はどのように接続できるか」という問いに回答する過程で、アッシリア史とフェニキア・カルタゴ史の対話の重要性について問題提起することである。第二に、アッシリア史とフェニキア・カルタゴ史の対話を通して、佐藤育子・丸小野壮太 (2024) における「人々の移動とネットワークの観点から、古代地中海世界史がグローバル・ヒストリーとしての意義を持つこと」という開かれた古代地中海世界史研究の事例研究の土台を構築することである [3]。

次に、本稿の構成は以下の通りである。第 1 章 (本章) では本稿の目的を示した。第 2 章では最新の研究動向を踏まえた開かれた古代地中海世界史研究についてまとめる。第 3 章ではアッシリア学とフェニキア・カルタゴ研究の両視点からアッシリア史におけるフェニキア・カルタゴ史、フェニキア・カルタゴ史におけるアッシリア史に関する先行研究を整理することを通して、アッシリア史とフェニキア・カルタゴ史の対話の成果と課題を明らかにする。第 4 章では本稿の「アッシリア史とフェニキア・カルタゴ史はどのように接続できるか？」というリサーチクエスチョンに回答する過程で、アッシリア史とフェニキア・カルタゴ史の対話について筆者らが互いに問いと資料に基づいてまとめる。第 5 章では本稿のまとめと今後の課題を示す。

2. 開かれた古代地中海世界史研究

まず、フェニキア・カルタゴ史の現状について述べてみよう。すでに別の論考で明らかにしたように、我が国ではフェニキア史は古代オリエント史、カルタゴ史はギリシア・ローマ史を中心とする西洋古代史のそれぞれ辺境の一分野として扱われ、これまでフェニキア・カルタゴ史としての一貫した研究がなされてこなかった領域である [4]。その理由の一つには、フェニキア語やポエニ語で記された文字資料の僅少性、特に文学作品等が現存しないことが挙げられる。ゆえにフェニキア・カルタゴ史を再構成するには、聖書学や西洋古典学、さらにはアッシリア学といった、ある時は隣人であり、ある時はライバルであり、そして征服者であるという他者の眼を通した記述が必要不可欠である。本論文もこのような史資料の出所の偏向性を考慮した上でまとめたものであることをお断りしておきたい。

さて、近年の新たな歴史的潮流は、古代地中海世界が従来のギリシア・ローマ史を中心とする古典古代という伝統的枠組みを超えて、西アジアや北アフリカとの関係性を含む共時性のなかで捉えられるようになったことにある [5]。つまりこの概念を応用すれば、西アジ

アから地中海世界にかけて横断的に俯瞰した地理的なよこ軸に、一貫した時間軸としてのたて軸を構築することが、より開かれた新しい古代地中海世界史像を描くことにつながるのではないかと考える。それはすなわちオリエントと地中海世界をつなぐことであり、そこに媒介者として存在したフェニキア人の存在に着目する意義は大きい。

特に筆者らが構築しようとする開かれた古代地中海世界史研究の「開かれた」には 2 つの意味があるが [6]、その一つは上述するように人々の移動とネットワークに注目し、古代地中海世界史がグローバル・ヒストリーとしての意義を持つことを明らかにすることである。近年、「移動」という切り口からフェニキア人を捉えた研究が注目され、脚光を浴びている。一つは、グローバル・ヒストリーの視点も交え、地中海世界全体を見晴らした、文化の伝播者としての異文化交流におけるフェニキア人の役割に注目した C. López-Ruiz の研究である [7]。もう一つは著者の移民としての経験を投影しつつ、ギリシア世界でのフェニキア人を相対化させ、アイデンティティの変容や創出について論じた D. Demetriou の研究である [8]。

これらの研究は、近年の筆者自身の関心とも合致し、フェニキア・カルタゴ史という日本では未開拓の学問体系を確立させる大きな推進力となっている。加えて、本論文における開かれた古代地中海世界史は、これまで着目されてこなかったアッシリア史とフェニキア史の対話という視点を盛り込む。

3. 先行研究整理

(1) アッシリア学

本節ではアッシリア学の視点からアッシリア史におけるフェニキア・カルタゴ史に関する先行研究を整理する。以下の論点 (計 3 点) を順番に論じる。

第一に、アッシリア史におけるフェニキア史の全体像を示した先行研究である。はじめに、Bagg, A. (2017) はアッシリア帝国と西方 (シリア・レバノン) との関係についてまとめ、アッシリア帝国のフェニキア諸都市 (アルワド・ビブロス・サムシムルッナ・テュロス) の支配についても言及している [9]。次に、Fales, M. (2017) はアッシリア史におけるフェニキア史の先行研究や資料を網羅的に整理した研究ノートであり、巻末の参考文献一覧は本稿の研究土台にもなる [10]。また、Baaklini, A.-A. (2020) はアッシリア帝国のフェニキア諸都市の支配 [11] について考察し、アッシリア帝国のフェニキア諸都市への実際の支配はそれほど深くなかったと結論づけた [12]。さらに、Rollinger, R. (2017) はアッシリア帝国と遠い西方 (エーゲ海) との関係を異文化接触に注目してまとめた [13]。同様の著者によって書かれた Rollinger, R. (2022) はアッシリア帝国における地中海の位置づけについて考察し、「内海」としての地中海を認識していたと結論づけた [14]。

第二に、アッシリア史におけるフェニキア史に関連する個別研究であり、ギリシア人に特化した個別研究が多くみられる。はじめに、Vér, Á. and T, Dezső (2013) はアッシリア帝国とギリシア人との交流について歴史的背景と貿易に注目してまとめられている [15]。また、Yamada, S. (2019) は東地中海沿岸の貿易におけるアッシリア帝国の支配に注目することでアッシリア帝国とギリシア人との関係について考察している [16]。さらに、Radner, K. and A, Vacek.(2022) はアッシリア王ティグラト・ピレセル 3 世時代の書簡 2 点を用いて、アッシリア人とイオニア人の関係性、さらには「イオニア人」のアイデンティティを提案している [17]。他には、美術史の視点から Collins, P. (2022) はニムルドから発見されたアッシリア / フェニキア風の象牙資料について関連する誓約文書 [18] も含めて考察した [19]。

第三に、2014 年 9 月 22 日から 2015 年 1 月 4 日まで開催されたメトロポリタン美術館における特別展「アッシリアからイベリアへ」である [20]。特別展「アッシリアからイベリアへ」のシンポジウム本 Aruz, J. and M. Seymour. (eds.) (2016) ではアッシリア学者 Marc Van De Mieroop や Paul Collins などの論稿も含まれている。これまで見てきたように、アッシリア史におけるフェニキア史に関する先行研究は上記のように数多く出版されている。一方、以下の 2 点が今後の課題ではないだろうか。第一に、アッシリア史とフェニキア・カルタゴ史の対話のより一層の充実である。というのも、例えば、Aruz, J. and M. Seymour. (eds.) (2016) はアッシリア史とフェニキア・カルタゴ史の両者が対象になっているが、アッシリア学者とフェニキア・カルタゴ研究者との対話、すなわち、アッシリア史とフェニキア・カルタゴ史の対話が行われているとは言い難い。第二に、第一のアッシリア史とフェニキア・カルタゴ史の対話に基づいた、現在のアッシリア学研究の潮流であ

る人々の移動とネットワーク[21]が起因する文化交流によるアイデンティティ[22]研究は今後の課題となるだろう。

(2) フェニキア・カルタゴ研究

フェニキア・カルタゴ史については、本土のフェニキア史と西方での植民市の状況、そして北アフリカのカルタゴ史についてそれぞれ数章を設け、三部構成で取りあげるというのが、以前の代表的な出版物のスタイルであった[23]。だが敢えて、本土フェニキア史に特化するという形で出版された J. Elayi の論考 (2013；英訳版は 2018) は、石器時代からペルシア時代にいたるまでのフェニキア本土の通史として有用であるが、特にアッシリアとの関係に 1 章を割いていることは注目に値する[24]。先述した López-Ruiz, C. (2021) は、フェニキアの芸術作品にみられるアッシリアの影響について言及している[25]。

紀元前 1 千年紀前半のレバント地方（東地中海沿岸部）は、アッシリアやバビロニア、エジプトなどオリエントの大国の興亡に巻き込まれ、そこに住む人々の命運もそれによって大きく左右された。G. Bunnens は、小国であるフェニキア諸都市と大国の関係を、アッシリアとのそれに絞って３つの時期に分けて考察している[26]。

第 1 段階は前 9 世紀から前 8 世紀初期にかけてである。アッシュル・ナツィルパル 2 世（在位前 883 －前 859 年）は、ティグラト・ピレセル 1 世（在位前 1114 －前 1076 年）以降、初めて地中海方面へ向けての西方遠征を行った王であり、以後息子のシャルマネセル 3 世の治世（在位前 858 －前 824 年）を通して常態化することとなる。しかし、この時期のアッシリアのフェニキアに対する関係は決して強圧的なものではなく、貢納と引き換えに自治が保証され、ギブ・アンド・テイクの関係が保たれていた時代であった。

第 2 段階は前 8 世紀の前半であり、アダド・ニラリ 3 世（在位前 810 －前 783 年）以降、西方との接触を示すアッシリア側の資料はしばらく姿を消す。この時期はフェニキア諸都市にとって発展と繁栄の時期でもあったに違いない。地中海においてもイベリア半島やサルデーニャ島、シチリア島でのフェニキア人の確固たる入植が考古学的に立証されていく時期とも重なる[27]。

第 3 段階は前 8 世紀後半のティグラト・ピレセル 3 世（在位前 744 －前 727 年）から始まる過酷な軍事遠征とそれに伴う領土の再編の時代である。被征服民の反逆防止をもくろんだ強制移住政策は、この時期以降規模を拡大して大々的に行われるようになり、一方で、西方への新天地に向けて移住した人々も増加したであろう。

なお、各諸王の年代記に見られるフェニキア都市との関係は、丸小野が作成した表 1 及び資料を参照していただきたい。

2014 年 9 月 22 日から 2015 年 1 月 4 日までニューヨーク・メトロポリタン美術館で開催された特別展「アッシリアからイベリアへ」では、図録とともに関連したシンポジウム本 Aruz, J. and M. Seymour. (eds.) (2016) が出版されたが、そこでは先述したアッシリア学者 Marc Van De Mieroop や Paul Collins などとともに、J. Boardman や W. D. Niemeire、N. C. Stampolidis らギリシア史の研究者、さらには M. E. Aubet や E. Gubel 、C. López-Ruiz など、著名なフェニキア研究者の論考も含まれており、古代地中海世界の多様性と広がりを改めて認識させられる。

4. アッシリア史とフェニキア・カルタゴ史の対話：—アッシリア史とフェニキア・カルタゴ史はどのように接続できるか？—

本章ではアッシリア史 (丸小野) とフェニキア・カルタゴ史 (佐藤) の対話をまとめる。なお、以下は佐藤と丸小野が互いに出題した問いであり、それぞれが問いに回答することでアッシリア史とフェニキア・カルタゴ史の対話のはじまりとする。

佐藤→丸小野：(1) アッシリア史から考えるフェニキア・カルタゴ史 問１アッシリア資料においてフェニキア都市はどのように記述されているか？ 問２アッシリアにとってフェニキア人の特性はどのように利用されていたのか？
丸小野→佐藤：(2) フェニキア・カルタゴ史から考えるアッシリア史 問３フェニキア・カルタゴ史の資料ではアッシリアがどのように記述されているか？ 問４フェニキア人のネットワークにおいてアッシリアはどのような役割を果たしたか？

(1) アッシリア史から考えるフェニキア・カルタゴ史

問１　アッシリア資料においてフェニキア都市はどのように記述されているか？

はじめに、結論から論じると、アッシリア資料においてフェニキア都市は①軍事的な要地[28]、②経済的な要地[29]、③①軍事的な要地かつ②経済的な要地としてのネットワークの要地[30]の計3点のように記述されている。

①中期アッシリア時代から新アッシリア時代におけるティグラト・ピレセル1世治世の王碑文資料1(レバノン山に進軍/初の地中海遠征)、サルゴン2世治世の王碑文資料4(初のキプロス遠征)、センナケリブ治世の王碑文資料5(ハッティ遠征)、アッシュルバニパル治世の王碑文資料10(アッシュルバニパル第三の遠征)における軍事遠征に関する記述からフェニキア都市はアッシリア帝国の西方への領土拡大における軍事的な要地であることが読み取れる。

②シャルマネセル3世治世の王碑文資料2(地中海遠征の常態化)、ティグラト・ピレセル3世治世の書簡資料3(アッシリア帝国の属州としてのテュロスにおける貢納義務)、センナケリブ治世の王碑文資料5(アッシリアの傀儡政権シドンを樹立)の記述から経済的な要地であることが読み取れる。

③エサルハドン治世の資料6(エサルハドンとバアルの誓約文書)の記述からアッシリア帝国の東地中海支配においてテュロスの人々が活用され、①軍事的かつ②経済的な要地としてのネットワークの要地であることが読み取れる。

詳細は以下の表1：アッシリア資料におけるフェニキア都市の記述と本稿末尾の資料編(資料1～資料10)を参照されたい。

問２　アッシリアにとってフェニキア人の特性はどのように利用されていたのか？

はじめに、結論から論じると、アッシリア帝国においてフェニキア人の特性は問1の①軍事的な役割、②経済的な役割、③ネットワーク(①②)の役割として利用されていた。以下、前7世紀のエサルハドンとアッシュルバニパル治世を事例として回答する。

①軍事的な役割

表1：アッシリア資料におけるフェニキア都市の記述

アッシリア王(治世年)	記述内容	資料※末尾参照
ティグラト・ピレセル1世(1114-1076)	レバノン山に進軍。初の地中海遠征。	資料1
シャルマネセル3世(858-824)	地中海遠征の常態化。	資料2
ティグラト・ピレセル3世(744-727)	アッシリア帝国の属州としてのテュロス(ヒラム2世の次のマッテン2世)における貢納義務。	資料3
サルゴン2世(721-705)	初のキプロス遠征。	資料4
センナケリブ(704-681)	ルリからトゥバルをシドンの王にしてアッシリアの傀儡政権を樹立した。	資料5
エサルハドン(680-669)	シドン：遠征の結果、アブディ・ミルクティ処刑した。テュロス：バアルと誓約。	資料6 資料7 資料8
アッシュルバニパル(668-631?)	最初のエジプト遠征(シリア・パレスティナの22人の王：テュロスの王バアル)に貢献するが、アッシリアに背き、再び遠征対象になる。	資料9 資料10

資料９のアッシュルバニパル王碑文における「合計22名の海辺の王、海の中の王、乾いた地の王、私に属する僕は私の前に貢納品を運び、私の足に接吻をした。」からアッシリア帝国がフェニキア人を軍事的な役割として活用していたことが読み取れる。

②経済的な役割

資料６のエサルハドンとバアルの誓約文書「もしバアルあるいはティルスの人々の船がペリシテの地あるいはアッシリア領域内で難破した場合、船の積荷はすべてアッシリア王エサルハドンのものである。しかし、船の中の人々はすべて傷つけず、彼らの国へ送還する。」からアッシリア帝国がフェニキア人を経済的な役割として活用していたことが読み取れる。

③ネットワーク (①②) の役割

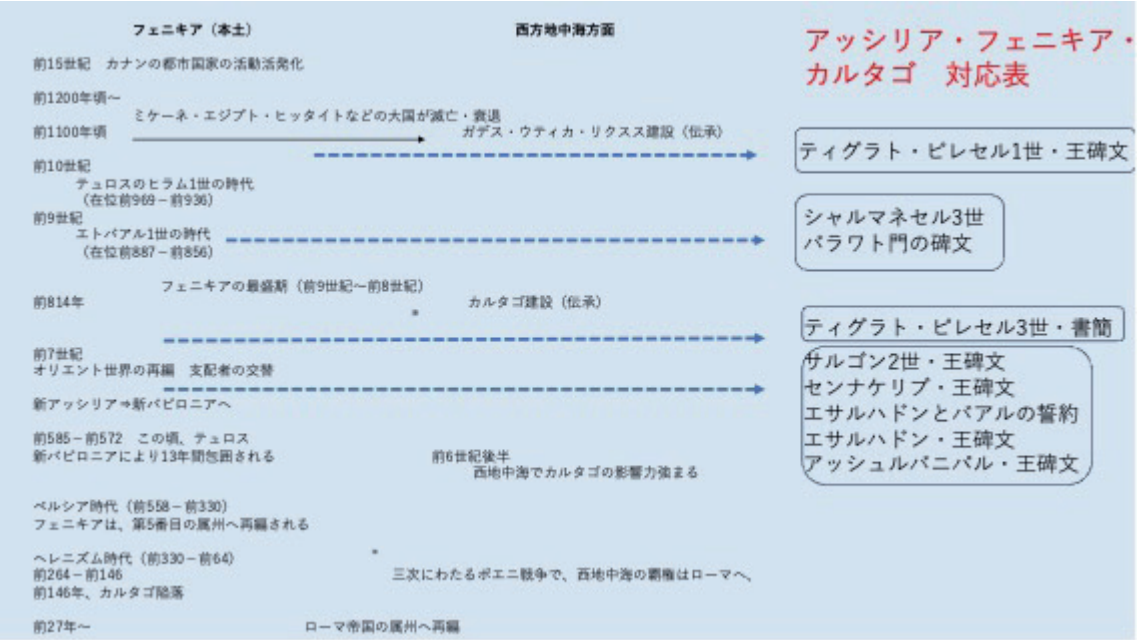
先行研究では、Rollinger, R. (2022) はエサルハドン治世のアッシリア王碑文の言及範囲がジブラルタル海峡の西まで拡張され、タルテッソス地方は極西の新しい境界を示すものとなったと論じる[31]。この根拠は資料８エサルハドン王碑文 (*RINAP* 4 60 の 10 行目) における“*a-di* KUR.*tar-si-si*”である。ここで、KUR.*tar-si-si* はトルコ地中海岸のタルススまたはスペイン南部のタルテッソスである。いずれにしてもエサルハドン時代のアッシリア帝国は自らの領域にフェニキア人の活動範囲である地中海を内包していたことが明らかであり、Rollinger, R. (2022) は KUR.*tar-si-si* が後者のスペイン南部のタルテッソスであると解釈する。他にも、エサルハドンのエジプト遠征に関する資料７ではフェニキア人がアッシリアとエジプトとの中継地としてアッシリアの反乱に関与していることが読み取れる[32]。総じて、アッシリア帝国の地中海またはエジプト方面のネットワークとしてフェニキア人が重要な役割を果たしていたのではないだろうか。

(2) フェニキア・カルタゴ史から考えるアッシリア史

丸小野から佐藤に対する二つの問いは、フェニキア人がなぜ地中海の西方へと発展していったのかという命題と関連している。そこで、これについては先ほど述べたアッシリアとの関りを、主にフェニキア・カルタゴ史の編年の中に位置づけて論ずるということで、まずは回答に替えたいと思う。資料として、以下に三者の関係を図表化したものを作成した。

これを見てもわかるように、古典の伝承によればフェニキア人がはるか西方に拠点を築いたのは前1100年頃、初期鉄器時代の始まりの頃である[33]。むろんこのような早期の考古学的証拠は見つかっていないが、アッシリアとの関りで考えれば、ティグラト・ピレセル１世がレバノン山へ進軍し、史上初の地中海遠征を行った時期に重なる（資料 1)。だがこの時期

表 2：アッシリア・フェニキア・カルタゴ　対応表



＊本図表は当日の発表で用いたスライドである。

を境としてアッシリアの国力は衰退に向かい、その後前9世紀のアッシュル・ナツィルパル2世まで地中海方面との接触を記す資料はない。

前10世紀にはいるとフェニキアではテュロスが興隆し、ヒラム1世の時代（在位前969‐936年）はその後200年ほど続く黄金時代の幕開けとなる。近年のスペイン南西部ウェルヴァでの発掘成果は、すでに前10世紀後半から前9世紀にかけてフェニキア人がそこに往来し、現地には先住民との取引のための交易所が設けられていたことを明らかにしている[34]。フェニキア人が極西に向かった大きな目的は、イベリア半島の豊かな鉱物資源の獲得であった。地中海各地に残るフェニキア人の痕跡が、このような鉱物資源獲得ルートと重なることは非常に興味深いが、やがてこうしたフェニキアの交易ネットワークは地中海全域に網の目のように広がっていくのである。外洋を航海できる大型船としての装備を整え、さまざまな物品や貴重な鉱物資源を運ぶフェニキアの船は、まさに旧約聖書に登場する「タルシシュの船」そのものであろう[35]。

さて、前9世紀に入ると、テュロスではヒラムの王朝は瓦解し、新しくエトバアルの王朝が開かれる。この王はアッシリアのシャルマネセル3世のバラワト門の門扉装飾にも描かれており[36]、資料2のアッカド語の碑文とともに、対岸では島から運ばれる貢物を待ち受けるシャルマネセル3世の一行が描かれている。エトバアル1世の時代（在位前887‐前856年）はビュブロス北方に新しくボトリュス（現在のバトルーン遺跡）[37]、アフリカにアウザ（位置不明）が築かれ、テュロスの政治的覇権はシドンにまで及び同君連合を形成した。この時期から前8世紀にかけて西方ではフェニキアの海外発展が拡大し、地中海各地に多くの植民都市が形成されていく。旧約聖書のエゼキエル書27章で紹介されるテュロスの交易相手国を地図に載せてみると、メソポタミア北部からアラビア半島、小アジアを包含し、エーゲ海から地中海西方のタルシシュ（タルテッソス）にいたる広範な交易ネットワークが、遅くとも紀元前8世紀半ばには完成していたことを確認することができる[38]。この時期のアッシリアとフェニキアの関係は、アッシリアがフェニキアの領土を蹂躙し、強制的にその支配下に組み込むというよりも、フェニキア人の世界交易における実力を温存させつつ、間接的にその利益を戦利品や貢納という形ですくい上げることにとどまっていたと言える。つまりアッシリアは、フェニキア人を通して自らは直接行くことのない、はるか地中海の彼方とつながることが可能であった。特に西方との関係で見れば、伝承によるカルタゴの建国年代である前814年は、まさにこの時期に相当する。なおカルタゴの建設年代に関しては、考古学と伝承のそれとの間に50年から70年ほどのずれを認めるのが一般的であったが、近年の放射線炭素年代測定法を用いた研究では、前9世紀末という伝承年代に近い年代設定を再考しようとする試みもある[39]。

しかし、アッシリアのティグラト・ピレセル3世の即位とともに事態は変わってゆく。前738年頃までに、今日のラタキアからトリポリまでを含む北部沿岸フェニキア諸都市は、北シリアのアラム人国家とともにアッシリアの属州の一部として再編されてしまった。ところが、南フェニキアを代表するテュロスは、アッシリアへの反乱に加担するものの政治的には無傷のままであり、貢納品と見返りに属国としては特恵的な地位にあった。同時代のテュロスの王はヒラム2世であり、当時、キプロス島のキティオンはヒラムの支配下にあった[40]。しかし、シャルマネセル5世のあと王位を継いだサルゴン2世は、資料4が示すように、アッシリアの王として初めて海を渡りキプロス島にまで遠征し、在地の7人の王たちから直接貢物を受け取っている。これはアッシリアが、従来のフェニキア人を介した経済的収奪にもはや満足できなくなったことを示しているのではなかろうか。

この時期テュロスを治めていたエルライオス（アッシリアの資料ではルリ）は、ヨセフスの資料によれば36年間王位にあった人物である[41]。アッシリアの文書によれば、前701年のセンナケリブの地中海遠征で、彼は領土を侵犯される危機に瀕し海の彼方に逃げるが、キプロスで不幸な死を遂げた（資料５）。おそらく、エトバアル1世以来続いてきたシドンとの同君連合も崩壊したと考えられる。一方でアッシリアは、その後のエサルハドン、アッシュルバニパルと続く帝国の最盛期を迎え、フェニキア諸都市もたびたび過酷な遠征の対象となった。アッシリアの宗主権を受け入れ、表面上は忠誠を誓うと見せかけながらも、ことあるごとに繰り返される反乱に対しては、断固とした処罰が待っていた。たとえばエサルハドンは反旗を翻したシドン王アブディ・ミルクティを処刑し、そこにエ

サルハドンの名前を冠した新しい都を置き、アッシリアの属州の一部として再編している[42]。

一方で資料 6 が示すように、テュロスには国内を監視する役人がアッシリアから派遣され、政治的には厳しい状況下に置かれたが、一定の条件のもとで経済活動には自由が認められていたことがわかる。前 8 世紀から前 7 世紀にかけては、西方でのフェニキア人の入植活動が頂点を迎える頃であり、アッシリアは地中海西方から本土にもたらされる莫大な利益を貢物や関税として吸収しようとしたのである。資料 8 は、この時期のアッシリアの王（エサルハドン）にとって、地中海のはるか西方も、フェニキア人を通してすでに自分のテリトリーとして確実に認識されていたことを示す興味深い資料である。

だが、このように次第に強圧化するアッシリアの干渉に対して、ついにテュロスは一旦は臣従したものの（資料９）アッシュルバニパルに対して反乱を企てる。海上を封鎖され、備蓄を絶たれた島の砦は降伏するほか選択の道はなく（資料 10）、テュロス王バアルの娘や王族の女性たちは、人質としてアッシュルバニパルの後宮に連行されたのである。

だが、アッシュルバニパルの治世の後急速に国力は衰退し、帝国各地で頻発する反乱の鎮圧に疲弊したアッシリアにもはやかつての栄光は戻らなかった。首都ニネヴェは前 612 年にバビロニアとメディアの連合軍によってついに陥落し、その 3 年後、アッシリアは完全に歴史の表舞台から姿を消すことになる。

以上、フェニキア・カルタゴ史の流れの中に位置づけて、アッシリアとフェニキアの関係をみてきた。すでに述べたように、当時のアッシリアとフェニキアの関係を示すものは、そのほとんどがアッシリア側からの王碑文や書簡などに限られており、その意味でも、アッシリア史（学）とフェニキア・カルタゴ史の「対等な」という状況での対話は生まれにくい。つまり強いて言えば、これが丸小野からの問いである問 3「フェニキア・カルタゴ史の資料ではアッシリアがどのように記述されているか？」の率直な回答になるのかも知れない。問 4「フェニキア人のネットワークにおいてアッシリアはどのような役割を果たしているか」については、フェニキア人の西方への発展が、アッシリアとの関りが明確に形成される以前にすでに始まっていることを考慮する必要があるだろう。つまり、フェニキア人が地中海に築いた交易ルートや各地とのネットワークは、朝貢と臣従というアッシリアとフェニキアの関係が明確になるに従い、それを補完し強化する役目を担ったのではなかろうか。丸小野が示す軍事的・経済的要地としてのフェニキア都市の重要性は、母市であるフェニキア諸都市のみならず地中海各地に建設された植民市との関係にも反映されていく。西方では前 6 世紀半ば以降、植民都市のなかでカルタゴが優位に立ち、テュロスに代わる新たな地中海の女王として発展していく。一方でフェニキア本土の諸都市は、次々と起こる周囲の大国の代替わりをものともせず、地中海がローマによって統一されるまで激動の数世紀を生き延びる。つまり、本土のフェニキア史のみならずカルタゴ史の視点も取り入れて、東方と西方の関係に目配りすることこそが、従来の空間軸や時間軸を超えて、古代地中海世界史をグローバル・ヒストリーとして理解することにつながると考えたい。そのためにも、アッシリアに続いてオリエントの大国となる新バビロニアやアケメネス朝ペルシアとフェニキア、さらにはカルタゴの関係を、アッシリアとの関係と比較してみていくことも今後の検討課題となろう。

5. おわりに

「はじめに」でも述べたように、本稿はアッシリア学を専門とする丸小野とフェニキア・カルタゴ史を専門とする佐藤による共著論文である。オリエント（西アジア）史の大国であるアッシリアとその周辺に位置するレバント地方、特にフェニキア諸都市との関係を、「問い」と「資料」にもとづいて互いに考察し、検討してきた。史資料の出所の偏向性もあり、両者のまったく対等な関係での「対話」には限界があるものの、両者の「接続」の重要性について問題提起できたのではないだろうか。「中心」であるアッシリアは、「周縁」のフェニキアを通して、はるか西方にまでつながっていることが資料や先行研究を通して確認できた。これは、グローバル・ヒストリーとしての古代地中海世界史研究の事例研究の土台づくりの第一歩であると考える。アッシリアとフェニキアとの関係についていえば、東地中海、特にキプロスに関しては比較的両者の史資料が充実していることを考慮して、今後は東地中海と西地中海の状況を対比させることも射程に入れつつ、さらなる時間軸と空間軸の拡大・延伸を目標に、開か

れた古代地中海世界史研究を継続していきたい。

【主な参考文献】

Aruz, J. and M, Seymour (eds.) (2016) *Assyria to Iberia: Art and Culture in the Iron Age,* Metropolitan Museum of Art.

Aubet, M.E.(2008) "Political and Economic Implication of the New Phoenician Chronologies", in C. Sagona (ed.) *Beyond the Homeland : Markers in Phoenician Chronology, (ANES supple.28)*, Leuven, pp.247-259.

Baaklini, A.-A. (2020) "The presence and influence of the Neo-Assyrian Empire in Phoenicia: textual and archaeological evidence", in K, Gavagnin and R. Palermo (eds.) *Imperial Connections. Interactions and Expansion from Assyria to the Roman Period. Volume 2. Proceedings of the 5th "Broadening Horizons" Conference (Udine 5-8 June 2017)*, Trieste, EUT Edizioni Università di Trieste, 2020, pp.13-27.

Bagg, A. (2017) "Assyria and the West: Syria and the Levant", in E. Frahm (ed.) *A Companion to Assyria,* Malden.

Bunnens, G. (2019) "Phoenicia in the Later Iron Age: Tenth century BCE to the Assyrian and Babylonian periods", in C. López-Ruiz and B. R. Doak (eds.), *The Oxford Handbook of the Phoenician and Punic Mediterranean*, Oxford, pp.56-73.

Collins, P. (2022) "Some thoughts on the Assyrian ivories from the Temple of Nabu at Nimrud", in D. Wicke and J. Curtis (eds.) *Ivories, Rock Reliefs and Merv: Studies on the Ancient Near East in Honour of Georgina Herrmann*, pp.69-82.

Demetriou, D. (2023) *Phoenicians among Others*, Oxford.

Docter, R. F. et al. "New radidocarbon dates from Carthage:bridging the gap between history and archaeology?", in C. Sagona (ed.), *Beyond the Homeland : Markers in Phoenician Chronology*, (*ANES supple*.28), Leuven, 2008, pp379-422.

Elayi, J. (2013) *Histoire de la Phénicie*, Paris.

Elayi, J. (2018) *The History of Phoenicia* (trans.), Atlanta,

Fales, M. (2017) "Phoenicia in the Neo-Assyrian Period: An Updated Overview", *State Archives of Assyria Bulletin* 23, pp.181-295.

Faust, A. and E, Weiss (2011) "Between Assyria and the Mediterranean World: The Prosperity of Judah and Philistia in the Seventh Century BCE in Context", in T. Wilkinson, S. Sherratt and J. Bennet (eds.) *Interweaving worlds: systemic Interaction in Eurasia: 7th to 1st millennia BC*, Oxford, pp.189-204.

Gonzáles de Canales, F et al. (2009) "The Two Phases of Western Phoenician Expansion beyond the Huelva Finds: An Interpretation", *AWE* 8. pp.1-20.

Harden, D. (1980) *The Phoenicians* (revised), London.

López-Ruiz, C. (2021) *Phoenicians and the Making of the Mediterranean,* Cambridge (MA) & London.

Moscati, S. (1968) *The World of the Phoenicians* (trans.), London.

Parpola, S. and K. Watanabe (1988) *Neo-Assyrian Treaties and Loyalty Oaths*, State Archives of Assyria 2, Helsinki.

Parpola, S. (2004) "National and Ethnic Identity in the Neo-Assyrian Empire and Assyrian Identity in Post-Empire Times", *Journal of Assyrian Academic Studies* 18/2, pp.5-22.

Radner, K. (2006) "Provinz. C. Assyrien", in *Reallexikon der Assyriologie* 11/1-2, pp.42-68.

Radner, K. and A, Vacek (2022) "The settlement of Yauna, 'Ionian' identity and the Greek presence on the Syrian coast in the second half of the eighth century BC: a reassessment of two letters from the Nimrud correspondence", *The Journal of Hellenic Studies* 142, pp.65–99.

Rollinger, R. (2017) "Assyria and the Far West: The Aegean World", in E. Frahm (ed.) *A Companion to Assyria,* Malden, pp.275-285.

Rollinger, R. (2022) "How the Mediterranean became the Mediterranean: Some neglected pieces of evidence for the history of the mental mapping of an inland sea", in J. Boardman, J. Hargrave, A. Avram and A. Podossinov (eds.) *Connecting the Ancient West and East,* Leuven, pp.1307-1331.

Vér, Á. and T, Dezső (2013) "Assyrians and Greeks: the Nature of Contacts in the 9th-7th Centuries BC", *Acta Antiqua Academiae Scientiarum Hungaricae* 53, pp.325-359.

Wasmuth, M.S. (2016) “Cross-Regional Mobility in ca. 700 BCE: The Case of Ass. 8642a / IstM A 1924 ” *Journal of Ancient Egyptian Interconnections* 12, pp.89-112.

Yamada, S. (2019) “Neo-Assyrian Trading Posts on the East Mediterranean Coast and “Ionians”: An Aspect of Assyro-Greek Contact”, in Nakata, I. (eds.) *Prince of the Orient: Ancient Near Eastern Studies in Memory of H. I. H. Prince Takahito Mikasa,* pp.221-235.

Yamada, S. (2022) “To Be Assyrian Residents: A Reflection on the Integration of the Subjugated People into the Assyrian Empire”, in J. Bach and S. Fink (eds.) *The King as a Nodal Point of Neo-Assyrian Identity,* Münster, pp.273-297.

栗田伸子・佐藤育子 (2016)『通商国家カルタゴ』(講談社学術文庫), 講談社 .

佐藤育子 (2021)「フェニキア人の海外ネットワーク : 前 1 千年紀前半の地中海世界」神崎忠昭・長谷部史彦編著『地中海圏都市の活力と変貌』慶應義塾大学文学部，pp.3-20.

佐藤育子 (2024)「フェニキア・カルタゴ研究の現状と課題」ヘレニズム～イスラーム考古学研究会編『ヘレニズム～イスラーム考古学研究』2023, pp.83-90.

佐藤育子・丸小野壮太 (2024)「歴史学と歴史教育の対話に基づいた開かれた古代地中海世界史研究の構築」ヘレニズム～イスラーム考古学研究会編『ヘレニズム～イスラーム考古学研究』2023, pp.9-14.

山田重郎 (2012)「アッシリア帝国による東地中海世界交易支配」歴史学研究会編『世界史史料 1 古代のオリエントと地中海世界』岩波書店，pp.52-53.

資料編

資料１　ティグラト・ピレセル 1 世・王碑文・Q005928 (16-25 行目)

私はレバノン山に進軍した (⌜*a*⌝-*na* KUR.*lab-na-ni* ⌜*lu*⌝ *al-lik*)。 私は私の主である偉大な神々アヌとアダドの神殿のために、杉の梁を切り倒し、運んだ。私はアムルの地まで進み、アムルの地を完全に征服した。私はビブロス、シドン、アルワドの支払いを受けた (⌜*ma*⌝-*da*-⌜*at*⌝-*ta ša* KUR.*gu-bal* KUR.*ṣi-du-ni* KUR.*ar-ma-da lu am-ḫur*)。私はアルワドの人々の船に乗り、アルワドという島 (「海の真ん中」) からアムルの地にあるツィミラまで、2 倍の 3 時間の旅を成功させた。私は海の馬と呼ばれるナーヒル (イルカ？) を海で殺した。

https://oracc.museum.upenn.edu/riao/Q005928/ (最終閲覧 2024 年 2 月 27 日)

資料２　シャルマネセル 3 世・バラワト門の碑文・Q004671

私はテュロスとシドンの人々から船の支払いを受けた (*ma-da-tú šá* GIŠ.MÁ.MEŠ *šá* URU.*ṣu-ra-a-a* URU.*ṣi-du-na-a-a am-ḫu-ur*)。

https://oracc.museum.upenn.edu/riao/Q004671/ (最終閲覧 2024 年 2 月 27 日)

資料３　ティグラトピレセル 3 世・Qurdi-Aššur-lamur 書簡・ND2430

テュロスのマッテン 2 世 (^{m}*ma-te-en-ni* [URU.*ṣur-a.a o*?]) はダナブの支配者に以下のような手紙を書いた。「王の銀を集めて、彼にあげましょう！」マッテン 2 世はこの言葉を彼の兄弟［人名］に送った時、王の代官が現れて言った。「私に貢納品を与えてください。」マッテン 2 世はダナブの支配者と話して、貢納品を与えるように言った。彼と一緒に来たシドンの人々 (⌜LÚ⌝.*ṣi-du-na-a.a*) は皆、代表を連れて私のところに来させ、私は貢ぎ物に署名して王に送ろう。代官は以下のように言った。「私はこのことを聞いて、貢納品を添えて、［］に手紙を書いた。」(中略)　おそらく、王は言うであろう。「彼らの畑は耕作されているのか？彼らの畑」(欠損部分) 今、ギリ・バアル (^{m}*gi-ri—ba-ʾa*-⌜*al*⌝)、［人名］［人名］、3 名の使者が貢納品を持ってきた。(欠損部分)

http://oracc.org/saao/P224412/ (最終閲覧 2024 年 2 月 27 日)

資料 4　サルゴン 2 世・王碑文・Q006488(145-149 行目)

さらに、ヤドナナ (キプロス) の地ヤーの土地の 7 名の王たち (7 LUGAL.MEŠ-*ni ša* KUR.*ia-aʾ na-gi-i ša* KUR.*ia-ad-na-na*)、その住まいは、はるか遠く、西海の真ん中に 7 日の距離にあり、その土地の名前は、遠い昔から今に至るまで、アッシリアでも、カルドゥニアシュの地（バビロニア）でも、私の先祖である王たちは誰も、私がカルデアとハッティ（シリア）の地での行為を、海の真ん中で、遠くから聞いたことがなかっ

た。その時、彼らの心は打ち震え、恐怖が彼らを襲った。彼らはバビロンにおいて、自分たちの土地の産物である金、銀、黒檀の容器、ツゲの木を私の前に持ってきて、私の足に接吻した。
https://oracc.museum.upenn.edu/rinap/Q006488/ (最終閲覧 2024 年 2 月 28 日)

資料５　センナケリブ・王碑文・Q003520(18-19 行目)

三度目の遠征において、私はハッティに進軍した。私の輝きに恐れたシドンの王ルリは (^{m}*lu-li-i* LUGAL URU.*ṣi-du-un-ni*)、テュロスから海の真ん中にあるヤドナナ（キプロス）(*ul-tu qé-reb* URU.*ṣur-ri a-na* KUR. *ia-ad-na-na ša* MURUB$_4$ *tam-tim*) に逃れ、姿を消した。私はトゥバル (^{m}*tu-ba-aʾ-lu*) を王座に置き、彼に私の支配権に対する支払いを課した。
https://oracc.museum.upenn.edu/rinap/Q003520/ (最終閲覧 2024 年 2 月 28 日)

資料６　アッシリア帝国・エサルハドンによる東地中海世界交易支配 (前 676 年頃)

エサルハドンとバアルの誓約

アッシリア王センナケリブの子アッシリア王エサルハドンがティルス王バアルおよび彼の息子たち、彼の孫たち、ティルスの人々すべて - 老いも若きも - との間に結んだ誓約。

あなた (バアル) のところにやってくる船。彼の言う事を聞いてはならない。王の代理人がいないところで (中略)　また、私 (エサルハドン) があなたに送った書簡をアッシリア王の代理人がいないところで開いてはならない。もし代理人が不在であれば、彼を待ってそれを開くか、あるいは使者を (中略)

もしバアルあるいはティルスの人々の船がペリシテの地あるいはアッシリア領域内で難破した場合、船の積荷はすべてアッシリア王エサルハドンのものである。しかし、船の中の人々はすべて傷つけず、彼らの国へ送還する。

これらはアッシリア王エサルハドンがその僕バアルに使用を許可した港と道である。―アッコ、ドル、ペリシテの地の範囲内すべて、また海岸沿いのアッシリア領域内の町々すべて。そしてビブロス、レバノン山、山中の町々のなか。

出典：山田重郎 (2012)「アッシリア帝国による東地中海世界交易支配」歴史学研究会編『世界史史料 1 古代のオリエントと地中海世界』岩波書店，pp.52-53. (一部筆者修正)
http://oracc.org/saao/P336126/ (最終閲覧 2024 年 3 月 3 日)

資料７　エサルハドン・王碑文・Q003263(13-19 行目)

私の遠征の途中において、クシュの王タハルカを信頼し、私の主であるアッシュル神のくびきを投げ捨て、横柄な態度で答え続けたテュロスの王バアル (^{m}*ba-ʾa-*「*lu*」MAN KUR.*ṣur-*「*ri*」) に対して、私は要塞を築いた。私は彼らの命を支えていた食糧と水の供給を絶った。私はエジプトから私の宿営を取り除き、サマリアの地方にある町アフェクから、エジプトの小川の近くにある町ラフィアまで、30 の道のりを、メルッハに向かってまっすぐ進んだ。私は縄と鎖と灌漑装置によって、井戸から引いた水を私の軍隊に与えた。
https://oracc.museum.upenn.edu/rinap/Q003263/ (最終閲覧 2024 年 2 月 28 日)

資料８　エサルハドン・王碑文・Q003289(表・9-11 行目)

私は、ヤドナナ（キプロス）からイオニア、タルシシまで (TA「KUR」.*ia-da-na-na* KUR.*ia-man a-di* KUR. *tar-si-si*)、海の真ん中にいる全ての王たちに手紙を書いた。
https://oracc.museum.upenn.edu/rinap/Q003289/ (最終閲覧 2024 年 2 月 29 日)

資料９　アッシュルバニパル・王碑文・Q003705(2・25-52 行目)

私の遠征の途中において、Baʾalu, king of the land Tyre, Manasseh, king of the land Judah, Qaʾuš-gabri, king of the land Edom, Muṣurī, king of the land Moab, Ṣil-Bēl, king of the land Gaza, Mitinti, king of the land Ashkelon, Ikausu, king of the land Ekron, Milki-ašapa, king of the land Byblos, Yakīn-Lû, king of the land Arwad, Abī-Baʾal, king of the land Samsimurruna, Ammi-nadbi, king of the land Bīt-Ammon, Aḫī-Milki, king of the land Ashdod, Ekištūra, king of the land Idalion, Pilagurâ, king of the land Kitrusi, Kīsu, king of the land Salamis, Itūandar, king of the land Paphos, Erēsu, king of the land Soloi, Damāsu, king

of the land Curium, Admēsu, king of the land Tamassos, Damysos, king of the land Qartiḫadasti, Unasagusu, king of the land Lidir, Buṣusu, king of the land Nūria 、合計 22 名の海辺の王、海の中の王、乾いた地の王、私に属する僕は私の前に貢納品を運び、私の足に接吻をした。
https://oracc.museum.upenn.edu/rinap/rinap5/Q003705/ (最終閲覧 2024 年 2 月 28 日)

資料 10　アッシュルバニパル・王碑文・Q003705(3・58-72 行目)

私の第三の遠征において、私は海の真ん中に住むテュロスの王バアル (ᵐ*ba-ʾa*]-⌜*li* LUGAL⌝ [KUR.*ṣur-ri*]) に対して進軍した。なぜならば、彼は私の命令を尊ばず、私の唇からの命令に従わなかったので、私は彼に対して前線の基地を設置した。彼の民が立ち去らないように、私は守備隊を強化した。私は海と陸で、彼の全ての経路を掌握し、彼に近づくことを断ち切った。私は彼らの命を守るための水と食物を彼らの口に乏しいものにした。私は彼らを逃げ場のない過酷な幽閉の中に閉じ込めた。私は彼らの生命を束縛した。私は彼らを私のくびきにひれ伏させた。
https://oracc.museum.upenn.edu/rinap/rinap5/Q003705/ (最終閲覧 2024 年 2 月 28 日)

註

1　第 29 回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会は、2024 年 3 月 9 日 (土) に金沢大学 / 石川県文教会館 202 会議室で開催された。研究発表当日にコメント・質問をしてくださった方々には感謝申し上げる。なお本稿は分担執筆による共著論文である。分担は以下の通りである。佐藤:第 2 章、第 3 章第 2 節、第 4 章第 2 節、第 5 章。丸小野：第 1 章、第 3 章第 1 節・第 4 章第 1 節。

2 本稿の研究背景となっている開かれた古代地中海世界史研究については佐藤育子・丸小野壮太 (2024) を参照されたい。

3　佐藤育子・丸小野壮太 (2024) p.11.

4　佐藤育子 (2024) p.83.

5 例えば、第 3 期岩波講座世界歴史 (2021 ～ 2023) では、前近代の 4 巻が西アジアとのセットで組まれている。古代史に関しては第 2 巻が『古代西アジアとギリシア : ～前一世紀』、第 3 巻が『ローマ帝国と西アジア : 前三～七世紀』という構成であり、これまでとは方向性が大きく異なっている。

6 佐藤育子・丸小野壮太 (2024)p.11.

7　C. López-Ruiz, *Phoenicians and the Making of the Mediterranean*, Cambridge (MA) & London, 2021.

8 D. Demetriou, *Phoenicians among Others*, Oxford, 2023.

9 Bagg, A. (2017) p.273.

10 Fales, M. (2017) pp.273-295.

11　アッシリア帝国の行政州については K. Radner (2006) を参照されたい。

12 Baaklini, A.-A. (2020) p.24.

13 Rollinger, R. (2017) p.280.

14　Rollinger, R. (2022) p.1307.　また、Faust, A. and E, Weiss (2011) もアッシリアと地中海との関係性について論じた論稿である。

15 Vér, Á. and T, Dezső (2013) p.359.

16 Yamada, S. (2019) pp.221-235.

17 Radner, K. and A, Vacek (2022) pp.65-99.

18　新アッシリア時代の誓約文書は Parpola, S. and K. Watanabe (1988) を参照されたい。

19 Collins, P. (2022) pp.69-82.

20　詳細は Aruz, J. and S, Michael (eds.) (2016) を参照されたい。なお、以下は特別展のウェブサイトである。
https://www.metmuseum.org/exhibitions/listings/2014/assyria-to-iberia (最終閲覧 2024 年 11 月 18 日)

21　同様の問題意識は Wasmuth, M.S. (2016) を参照されたい。

22　例えば、アッシリア学のアイデンティティ研究は Parpola, S. (2004) や Yamada, S. (2022) を参照されたい。

23　例えば、D. Harden, The Phoenicians (revised), London,1980; S. Moscati, *The World of the Phoenicians* (trans.), London,1968 など。佐藤育子 (2024) p.85. も参照のこと。

24　J. Elayi, Histoire de la Phénicie, Paris, 2013 ; *The History of Phoenicia* (trans.), Atlanta, 2018.

25 López-Ruiz, pp.262-263.

26　G. Bunnens, “Phoenicia in the Later Iron Age: Tenth century BCE to the Assyrian and Babylonian periods”, in C. López-Ruiz and B. R. Doak (eds.) *The Oxford Handbook of the Phoenician and Punic Mediterranean*, Oxford, 2019, pp.66-68.

27 西方地中海におけるフェニキア人の入植状況に関しては、佐藤育子 (2021) pp.10-16. を参照のこと。

28 例えば、Fales, M. (2017) pp.272-273. を参照されたい。

29 例えば、Faust, A. and E, Weiss (2011) pp.193-195. を参照されたい。

30 例えば、Rollinger. R. (2022) p.1321. を参照されたい。

31 Rollinger, R. (2022) p.1321. “With Esarhaddon the mental system of coordinates was expanded for the first time as far west as the Straits of Gibraltar when the region of Taršiši represented a new border marker of the far west.”

32 Fales, M. (2017) pp.272-273. 特に Fales, M. (2017) はアッシリア帝国のフェニキア人についての対応についてエジプトが西アジアに侵入することを防ぐための主要な戦略であったと論じる。

33 Diod. 5, 20, 1-3; Strab. 3, 5, 5; Vell. Pat. 3, 2, 1; Mela. 3, 46.

34 F. Gonzáles de Canales, L. Serrano and J. Llompart, “The Two Phases of Western Phoenician Expansion beyond the Huelva Finds: An Interpretation”, *AWE* 8, 2009, pp.3-4. ; M. E. Aubet, “Political and Economic Implication of the New Phoenician Chronologies”, in C. Sagona (ed.), *Beyond the Homeland : Markers in Phoenician Chronology,* (*ANES supple*.28), Leuven, 2008, p.247.

35「列王記上」9 章 26 － 28 節；10 章 22 節。「エゼキエル書」27 章 25 節他。なお、「タルシシュの船」の解釈に関しては、栗田伸子・佐藤育子『通商国家カルタゴ』講談社学術文庫，2016, pp. 51-53 を参照のこと。

36 バラワト門の当該門扉装飾に関しては、現在大英博物館が所蔵している。https://www.britishmuseum.org/collection/object/W_Rm-1041(最終閲覧 2024 年 10 月 13 日)

37 Joseph. *Ant. Jud*. 8, 324.　なお、バトルーン遺跡に関しては、2018 年より中部大学とレバノン大学の合同調査隊が発掘作業を続けており、その成果に関しては日本西アジア考古学会の HP 上で閲覧可能である。http://jswaa.org/wp/wp-content/uploads/2024/01/134-138-POS02-nishiyama_levant.pdf (2023 年度の成果報告；最終閲覧 2025 年 1 月 20 日)

38「エゼキエル書」27 章 12 － 24 節ではテュロスの交易相手国が列挙され、世界中の物品が集まった国際商業都市としての繁栄を窺い知ることができる。

39 R. F. Docter, F. Chelbi, B. Maraoui Telmini, A, J, Nijboer, j. van der Plicht, W. van Neer, K. Mansel and S. Garsallah, “New radidocarbon dates from Carthage:bridging the gap between history and archaeology?”, in C. Sagona (ed.), *Beyond the Homeland : Markers in Phoenician Chronology,* (*ANES supple*.28), Leuven, 2008, p.417.

40 *KAI*, no.31.

41 Joseph. *Ant. Jud*. 9, 284.

42 *RINAP* 4, no.1: ii 65–80　http://oracc.org/rinap/Q003230/　(最終閲覧 2025 年 1 月 26 日)